九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

規則をめぐるヴィトゲンシュタインのパラドクス

林, 大悟
九州大学大学院 : 博士課程 : 倫理学

https://doi.org/10.15017/1430877

出版情報：哲学論文集. 37, pp.87-103, 2001-09-25. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

規則をめぐるヴィトゲンシュタインのパラドクス

林　大悟

序

「規則」をめぐる考察はヴィトゲンシュタインにとって非常に重要な位置を占めている。ヴィトゲンシュタインが生涯にわたって問題とした論理・言語・文法などの考察に規則という概念は常に密接に結びついている。更に『哲学探究』の中心概念の一つである言語ゲームの問題は言語という規則に従うことの問題であるし、数学に関する考察も数学の規則に従うという問題を必然的に含む。ヴィトゲンシュタインのあらゆる考察は規則の問題と不可分に結びついているのである。

ヴィトゲンシュタインは『探究』一八五節〜二四二節において「規則に従うこと」に関する考察を主題的に展開している。[1]「規則に従うこと」に関する考察はその二〇一節において頂点に達する。二〇一節は『探究』の中でも難解なテキストの一つであり、その箇所をめぐる様々な解釈が研究者の間で行われ、その解釈をめぐる激しい論争も繰り返されてきた。二〇一節、とりわけ二〇一節第一パラグラフにおけるヴィトゲンシュタインの立場をいかに理解するかが解釈上の大きな対立点

となっているのである。

しかし、これまでのどの解釈も「規則に従うこと」に関するヴィトゲンシュタインの主張の核心を捉えていない。「規則に従うこと」に関する議論の核心は二〇一節の「規則は行動の仕方を決定できない」というテーゼにあるのである。このテーゼにこそヴィトゲンシュタインの積極的な主張が集約されているのであり、ヴィトゲンシュタイン哲学の独自性が現れているのである。

このテーゼを解明するために本稿では『探究』のテキストに忠実な二〇一節の解釈を試みる。それはヴィトゲンシュタインが二〇一節で何を主張し何を批判しているかを具体的に検討することである。そしてそのような作業は二〇一節で述べられているパラドクスが何であるかも明らかにするであろう。この課題を果たすために、本稿では二〇一節以前の一八五節、一九八節などのテキストを解釈の手掛かりとする。「規則は行動の仕方を決定できない」というテーゼはまさに一八五節を出発点とした規則をめぐる考察の頂点に位置するのである。

一　二〇一節をめぐる解釈の対立

「我々のパラドクスは、規則は行動の仕方を決定できないであろう、なぜならどんな行動の仕方も規則と一致させることができるから、ということであった。その答えは、どんな行動の仕方も規則と一致させられるのであれば、矛盾させることもできる、ということであった。それ故ここには一致も矛盾も存在しないのであろう。

ここに誤解があるということは、我々がこのような思考過程のなかで解釈に次ぐ解釈をおいているということのうちにすでに示されている。まるで、我々が再びその背後にある解釈を考えるまで、各々の解釈が少なくとも一瞬の間我々を安心させるかのように。すなわちこのことを通じて我々は、解釈ではなく、規則の把握、すなわち応用のそれぞれの状況で我々が

「規則に従う」や「規則にそむく」と呼ぶようなものを表すようなものが存在するということを示すのである。

それ故、規則に従う各々の行動は解釈であると言いたくなる傾向がある。しかし人は規則の表現を別の規則の表現で置き換えたもののみを「解釈」と呼ぶべきである。」(§201)

『探究』二〇一節はソール・A・クリプキによって「懐疑的パラドクス(sceptical paradox)」という形でクローズアップされた。[2] クリプキの解釈は『探究』二〇一節第一パラグラフを理解しようとする試みである。クリプキはこの二〇一節第一パラグラフ全体をヴィトゲンシュタインの主張として理解し「懐疑的パラドクス」と位置づける。すなわちヴィトゲンシュタインはこの箇所で「何らかの語で何らかの事を意味している、といったことはあり得ない」(Kripke, p.55)というパラドクスを主張しているというのである。

しかし彼の解釈が誤りであるということは、現在では、ほとんどの研究者によって指摘される。その代表としてマルコムやマッギンなどが挙げられるだろう。[3] クリプキの解釈が誤っているのは二〇一節の第二パラグラフで「ここに誤解がある」とヴィトゲンシュタイン自身が指摘しているからである。つまりクリプキは二〇一節のこの箇所全体をヴィトゲンシュタインが主張するパラドクスと理解するが、ヴィトゲンシュタインはそこに誤解を見ているからである。これに対して、一般的な解釈は「誤解がある」というテキスト上の証拠から、ヴィトゲンシュタインがパラドクスを受け入れるどころか拒否していたのだ、と主張する。解釈上の基本的な対立は二〇一節に対するヴィトゲンシュタインの態度をどのように理解するかにある。クリプキはヴィトゲンシュタインが二〇一節第一パラグラフの内容を受け入れていたと理解し、他の研究者は受け入れていないと主張する。

しかし、このような解釈上の対立点があるのと同時に、両者ともに共通する前提がある。それは二〇一節のパラドクスが「規則は行動の仕方を決定できないであろう、なぜならどんな行動の仕方も規則と一致させることができるから」の部分を指す、ということである。クリプキもその批判者も二〇一節のこの箇所をパラドクスと理解しているということに関しては

共通しているのである。[4]

確かに二〇一節第二パラグラフで「誤解がある」と指摘されているのだから、この箇所全体をヴィトゲンシュタインの主張と理解するクリプキに賛成することはできない。しかし、それではなぜヴィトゲンシュタインは「我々のパラドクス」と「我々の」という表現を使っているのだろうか。ヴィトゲンシュタインがパラドクスを認めていないと理解する一般的な解釈によると二〇一節の第一パラグラフには積極的な論点は見いだせないことになる。しかしヴィトゲンシュタインがこの箇所の内容を完全に否定するのなら「我々の」という表現は不自然である。ヴィトゲンシュタインは二〇一節第一パラグラフのある箇所に誤解を指摘するが、その中にもヴィトゲンシュタインが積極的に主張するパラドクスが述べられていると考えるのが自然ではないか。確かにヴィトゲンシュタインは二〇一節でこの箇所に対する批判を行っている。ヴィトゲンシュタインがそこで何を批判しているのかを改めて検討し直さなければならない。

二　「規則に従うこと」の意味

「我々のパラドクスは、規則は行動の仕方を決定できないであろう、なぜならどんな行動の仕方も規則と一致させることができるから、ということであった。その答えは、どんな行動の仕方も規則と一致させられるのであれば、矛盾させることもできる、ということであった。それ故ここには一致も矛盾も存在しないのであろう。」（§201）

二〇一節第一パラグラフ第一文は「規則は行動の仕方を決定できないであろう」と「なぜならどんな行動の仕方も規則と一致させることができるから」の二つのテーゼから構成されている。ヴィトゲンシュタインの第一の指摘は「その答えは、どんな行動の仕方も規則と一致させられるのであれば、矛盾させることもできる、ということであった。それ故ここには一致も矛盾も存在しないのであろう」である。この答えは「なぜならどんな行動の仕方も規則と一致させることができるから」

に対する答えである。これはどのような意味なのであろうか。

仮に何を行ったとしてもそれを規則に一致させることができるとしよう。例えば「⇨」という規則に対して実際に右に進んでも規則に一致していると言うことができ、左に進んだとしても規則に一致していると言うことができるとしよう。すると、同様に「⇦」に対して右に進んでも左に進んでも規則にそむいていると言うことができることになる。どんな行動も規則と一致させられるのなら、同様にどんな行動も規則にそむかせることができる（矛盾させることもできる）ことになる。すると「規則に一致している」ことの基準がなくなってしまうのである。「ある行動が規則に一致している」ということが意味を持つのは「ある行動が規則にそむいている」ということが意味を持つからである。どんな行動も規則と一致させることができ、規則にそむかせることができるのなら、そもそも「規則に一致する」ということが意味を持たなくなってしまう。「どんな行動の仕方も規則と一致させることができる」を主張したとたん、に「規則に従う」ということが無意味になってしまうのである。[5] これがヴィトゲンシュタインの「その答え」の内容、第一の反論である。二〇一節第一パラグラフの「どんな行動の仕方も規則と一致させることができる」はこうして形式的に否定される。

ところで、二〇一節の第二パラグラフでヴィトゲンシュタインの第二の批判が述べられている。「ここに誤解があるということは、我々がこのような思考過程のなかで解釈に次ぐ解釈をおいているということのうちにすでに示されている。」ヴィトゲンシュタインは二〇一節第一パラグラフに対し「解釈に次ぐ解釈を行う」ということに誤解があると言っている。しかし二〇一節の第一パラグラフには「解釈」という語が登場しない。これはどのような批判なのだろうか。

ヴィトゲンシュタインは二〇一節第一パラグラフで「我々のパラドクスは〜であった(war)」「その答えは〜であった(war)」と過去形を使っている。ということは、ここで言われていることは『探究』の中ですでに行われた議論を受けていると考えるべきである。二〇一節より以前の箇所から二〇一節に光を当てなければいけない。二〇一節第一パラグラフは一九八節での対話者の発言を再現したものなのである。ヴィトゲンシュタインの批判を明らかにするために、一九八節のヴィトゲンシ

ュタインと対話者との対話と二〇一節の内容との対応関係が手掛かりとなる。

三　「解釈」と「行動」の断絶

「「しかし、規則は私がこの場所で何をすべきかをどの様にして私に教えることができるのか？私がたとえ何をしたとしても、それはなんらかの解釈を通じて規則と一致している」―いや、そのように言うべきではない。そうではなくどの解釈も、解釈されるものとともに、空中にぶら下がっている。各解釈は解釈されるものにとって支えになり得ない。解釈だけでは意味を決定できないでのである。」（§198）

二〇一節の「どんな行動の仕方も規則と一致させることができる」というテーゼが一九八節ですでに「私がたとえ何をしたとしても、それはなんらかの解釈を通じて規則と一致している」という形で、対話者の意見として述べられている。ここで対話者は「どんな行動の仕方も規則と一致させることができる」の根拠として「何らかの解釈を通じて」を挙げている。対話者曰く、どんな行動の仕方も規則と一致させることができるのはどんな「規則」も「規則の解釈」によって「行動」と一致させることができるからである。すなわち「規則→解釈→行動」の図式が成立するからである。二〇一節の問題のテーゼはこの一九八節の対話者の発言の再現である。ヴィトゲンシュタインが二〇一節で「ここに誤解があるということは、我々がこのような思考過程のなかで解釈に次ぐ解釈をおいているということのうちにすでに示されている」と指摘するとき一九八節のこの対話者の発言を想定しているのである。ヴィトゲンシュタインがこの対話者の見解のどの点を批判しているのかを一九八節に即して検討しよう。

一九八節の対話者の発言に続いてヴィトゲンシュタインは言う「いや、そのように言うべきではない。そうではなくどの解釈も、解釈されるものとともに、空中にぶら下がっている。各解釈は解釈されるものにとって支えになり得ない。解釈だ

けでは意味を決定できないでのである。」ヴィトゲンシュタインの批判の核心は「解釈だけでは意味を決定できない」である。「意味」とは何であるのか。「我々がこの語を理解していることに疑いはないが、他方その意味はその適用にある」（§197）とあるように「語の意味」は「語の適用」である。つまり、「意味」とは「語（規則）の実際の適用」すなわち「行動」である。解釈だけでは行動の仕方を決定できないのである。ヴィトゲンシュタインの批判はすなわちこうである。解釈から行動が決定されること、すなわち「解釈→行動」の図式は成立しないのである。「解釈されるもの」とは「規則」である。「解釈」は「解釈されるもの（規則）」の支えになり得ず、両者は宙に浮いている。「規則」も「規則の解釈」も同じレベルにあるのであり、「規則」や「規則の解釈」から「行動」を一義的に決定することはできないのである。

ところで、これは具体的にはどの様なことを主張しているのだろうか。そもそも「解釈」とは何だろうか。それは二〇一節の最後の一文で定義されている。「それ故、規則に従う各々の行動は解釈であると言いたくなる傾向がある。しかし人は規則の表現を別の規則の表現で置き換えたもののみを「解釈」と呼ぶべきである。」（§201）「解釈」とは規則の表現を別の表現でパラフレーズしたものである。たとえば「⇨」という記号（規則）に対して「右に進め」と表現すること、これは「⇨」を「右に進め」という別の記号で置き換えたもの、すなわち「⇨」の「解釈」である。規則も解釈も同じ言語の側にある。それに対して「⇨」という記号をわれわれが見て実際に右の方向に進んだとしよう。するとそれはもはや「解釈」ではなく、実際の行動である。

解釈から行動の仕方が決定できないという批判は「私がたとえ何をしたとしても、それはなんらかの解釈を通じて規則と一致している」（§198）が成立しないことを意味する。そして二〇一節の「どんな行動の仕方も規則と一致させることができる」というテーゼは一九八節のこのテーゼの再現である。ヴィトゲンシュタインは二〇一節で「ここに誤解があるということは、我々がこのような思考過程のなかで解釈に次ぐ解釈をおいているということのうちにすでに示されている」と指摘するが、それは「どんな行動の仕方も規則と一致させることができる」が「規則→解釈→行動」という図式を前提しているか

らである。

二〇一節のヴィトゲンシュタインによる第二の批判のポイントは「解釈」から「行動」を決定することはできないということである。本稿二の批判とともに「どんな行動の仕方も規則と一致させることができる」というテーゼは批判される。このことは二〇一節のその箇所で使われている動詞から明らかである。「なぜならどんな行動の仕方も規則と一致させることができる（sei）から」の部分にseiという間接話法（接続法Ⅰ式）が用いられている。つまり、この箇所はヴィトゲンシュタインの意見ではない。このテーゼはヴィトゲンシュタインの主張ではなく、ヴィトゲンシュタインの対話者のものである。ヴィトゲンシュタインが「誤解がある」と言って批判するのは解釈から行動を決定できるという見解である。「解釈」は規則と行動の橋渡しとしての役割を果たさず、「規則―解釈」と「行動」の間には断絶があるのである。「規則」にいくら解釈を行っても「行動の仕方」を決定することができない。すなわち「規則は行動の仕方を決定できない」。このテーゼがヴィトゲンシュタインの積極的な主張なのである。

四　規則は行動の仕方を決定できない

これまでの考察から二〇一節「我々のパラドクスは、規則は行動の仕方を決定できないであろう、なぜならどんな行動の仕方も規則と一致させることができるから、ということであった」の後半のテーゼ、すなわち「どんな行動の仕方も規則と一致させることができる」が否定されているということが明らかとなった。しかしこの箇所の前半部分、すなわち「規則が行動の仕方を決定できない」はヴィトゲンシュタイン自身が主張するテーゼである。この命題をヴィトゲンシュタインが否定しているのなら、二〇一節の第一パラグラフは完全に否定されていることになる。もちろん「規則は行動の仕方を決定できない」というテーゼと「どんな行動の仕方も規則と一致させることができる」というテーゼは論理的に独立であり、後者

のテーゼの否定が前者のテーゼの否定に帰結するというわけではない。

二〇一節の文頭でヴィトゲンシュタインは「我々のパラドクス」と言っている。それ故「規則が行動の仕方を決定できない」はヴィトゲンシュタインの見解でありこの箇所こそがヴィトゲンシュタインの主張するパラドクスである、と言いたくなる。このように言うと、「我々のパラドクス」とはヴィトゲンシュタインの見解であるという意味ではなくここで考察の対象としている「パラドクス」という意味である、と反論されるかもしれない。しかし、このテーゼはヴィトゲンシュタインの主張するテーゼなのであり、このテーゼこそが「パラドクス」といわれるテーゼなのである。「どんな行動の仕方も規則と一致させることができる」に対する指摘が一九八節の時点で行われていたように、このテーゼも二〇一節に先立つテーゼで具体的に描かれているのである。我々は一八五節に立ち返らなければならない。

「我々は今や彼に別の基数の列を書くことを教え、例えば「＋1」という形式の命令に0,n,2n,3n等々の形式の列を書くように、従って「＋1」という命令には基数列を書くようにさせる。—我が練習をし、1000までの数空間における彼の理解力の抜き打ち検査をするとしよう。／我々は今とにかく生徒に1000を越えた列(例えば＋2)を続けさせる—すると彼は1000, 1004, 1008, 1012と書く。／我々は彼に言う「見ろ！君は何をやってるんだ！」—彼は我々を理解しない。我々は言う「君は2を足さねばならなかったんだ。見ろ、君はどの様にして列を始めたんだ！」—彼は答える「ええ！なんで正しくないのですか？私はこのようにすべきだと思ったのです。」—あるいは彼が列を指しながら「しかし私は同じ仕方で続けてきたんです。」と言ったと仮定せよ。—このとき「しかし君は・・・が分からないのか？」と言ったとしても何の役にも立たないであろうし、彼に以前の説明や例を繰り返したとしても何の役にも立たないだろう。」(§185)

この教師と生徒のやりとりが何を意味するかに注目しなければならない。この節でのやりとりはこうである。教師は生徒に「＋2」という「規則」を与える。ところが生徒は、「1000, 1004, 1008, 1012」という答えを出す。「1004, 1008, 1012」という「1002, 1004, 1006」とは別の答え(行動)を現実に出している。教師は「＋2」という規則から「1002, 1004, 1006」

という答え「行動」を生徒に決定させることができない。「＋2」という規則がすべての答えを前もって決定できないのである。これは「規則が行動の仕方を決定できない」ということである。そして、これはヴィトゲンシュタインによって提示された具体例である。201節の「規則が行動のしかたを決定できない」はヴィトゲンシュタインのテーゼなのである。

さらに、教師は生徒に「＋2」の規則に従うことを教えようとして以前の説明を繰り返す。「君は2を足さねばならなかったんだ。見ろ、君はどの様にして列を始めたんだ！」。しかし、それでも生徒は「1000, 1004, 1008, 1012」が「＋2」の規則に従っていると主張する。「私はこのようにすべきだと思ったのです。」「しかし私は同じ仕方で続けてきたんです。」ここで、生徒に対する教師の反応に注目すべきである。教師は「＋2」という規則を「君は2を足さねばならなかった」という別の記号で置き換えている。つまり先ほどの「解釈」の定義からわかるように、教師は「＋2」の「解釈」を行っているのである。教師は規則の解釈から行動の仕方を決定させようとしている。しかし、教師が解釈をいくら繰り返しても生徒を「＋2」の規則に従わせることができない。「彼に以前の説明や例を繰り返したとしても何の役にも立たないだろう。」（§185）これは、解釈が行動の仕方を決定できないという具体例、すなわち「規則の解釈」が「行動」を決定できないという例である。このとき、我々ができることは説明を繰り返すことではなく、実際に数列を書いて見せる・生徒の手を取って書かせるということ等であろう。すなわち実践というレベルで訓練させることである。

このような具体例ではっきりと例示されているように「＋2」（規則）が「1002, 1004, 1006」という答え（行動）を決定することはできない。そして「＋2」（規則）に「君は2を足さねばならなかったんだ」という説明（解釈）を加えても「1002, 1004, 1006」という答え（行動）を決定させることはできないのである。「解釈」とは「規則」を別の語で置き換えたものである。「規則」も「規則の解釈」も言語という同じレベルにあるのであり、それらと実際の「行動」との間には断絶があるのである。

ヴィトゲンシュタインは二〇一節の「規則が行動のしかたを決定できない」というテーゼを肯定している。「我々のパラド

クス」というパラドクスとはこのテーゼのことを指し、それはヴィトゲンシュタインの主張するパラドクスである。なぜなら、我々は通常「規則」が「行動」を前もって一義的に決定していると思いがちであるからである（あるいは「規則」の「解釈」が「行為」を一義的に決定していると思いがちだからである）。ヴィトゲンシュタインはこのような通常の考えに反論しているのである。我々の通常の考えに反し、「規則」もその「解釈」も「行動」を決定できない。そしてこのように「規則―解釈」と「行動」との間の断絶を見いだす主張こそがヴィトゲンシュタインの積極的な主張であり、ヴィトゲンシュタインの「パラドクス」なのである。

五　ヴィトゲンシュタインのパラドクス

ここで、従来の二〇一節の解釈を想起しよう。従来の解釈すべてに共通な点は二〇一節のパラドクスが「規則は行動の仕方を決定できないであろう、なぜならどんな行動の仕方も規則と一致させることができるから」の部分全体を指す、ということである。一般的な解釈はヴィトゲンシュタインがこのパラドクスを退けていると理解する。このような解釈によると二〇一節第一パラグラフにヴィトゲンシュタインの積極的な主張は全く見出されないことになる。しかし「規則は行動の仕方を決定できない」こそがヴィトゲンシュタインの積極的な主張でありこれこそが「我々のパラドクス」なのである。

このような通常の解釈とは異なり、クリプキはヴィトゲンシュタインがパラドクスを認めていると理解する。しかし、クリプキは二〇一節の第二パラグラフにある「誤解がある」というヴィトゲンシュタインの指摘を無視し、二〇一節第一パラグラフ全体をヴィトゲンシュタインの主張と解釈している。この見落としは単なるテキスト上の見落としではない。ヴィトゲンシュタインの主張そのものを誤解するような見落としである。クリプキの理解する「懐疑的パラドクス」とヴィトゲンシュタインのパラドクスは決して同じ主張ではない。

クリプキは『探究』二〇一節第一パラグラフからヴィトゲンシュタインの主張としての「懐疑的パラドクス」を導く。クリプキが示した例は、「68＋57」という計算の例である。彼は、「パラドクス」を懐疑論者からの挑戦という形で語る。クリプキは、我々が57より小さな数の加法しか行ったことがないと仮定する。懐疑論者曰く「＋」という記号でわれわれがプラス（加法）を意味することは過去においても現在においても不可能だという。なぜなら、我々が「＋」で意味していたのは「＋」で表されるプラス算（アディション）なのではなく「⊕（quus）」で表される「クワス算（quaddition）」かもしれないからである。「⊕」（クワス算）とは次のように定義される。「もし、x，y＜57ならばx⊕y＝x＋y／そうでなければx⊕y＝5によって定義される。」（Kripke, p. 9）このような定義から、懐疑論者は我々が「＋」でプラス算数か、クワス等かのどちらかを意味しているという事実はあり得ないというのである。すなわち、我々が「68＋57」という計算を行うとき、普通は「125」という答えを出すが、そのことに関して懐疑論者は懐疑を抱くのである。我々が「＋（プラス）」と思って使用した記号は、実は「⊕（クワス）」であったかもしれないではないかというのである。もしその計算がクワス算だったとするならば答えは「5」ということになる。つまり「＋」という記号は、プラス算ともクワス算とも解釈しうるのであるから、如何なる答えもその「＋」の記号に合致し得るというのである。そしてこのような懐疑論はさらに一般化され「何らかの語で何らかの事を意味している、といったことはあり得ない」（Kripke, p. 55）と言われる。クリプキはこの「懐疑的パラドクス」をヴィトゲンシュタインが認めるパラドクスと理解するのである。(6)

確かに一八五節の議論の構造とクリプキが「懐疑的パラドクス」で展開している構造とは極めて類似しているように見える。一八五節の生徒は「＋2」という「規則」を与えられて「1004，1008，1012」という答えを出す。クリプキの懐疑論者も「68＋57」という規則を与えられたとき「125」ではなく「5」だと主張するのである。両者ともに「規則」から一定の「行動」が導き出されないという点で同じ構造をしている。しかし一八五節の生徒とクリプキの懐疑論者とのあいだには決定的な違いがある。それは「解釈」から答え（行動）が決定できるという見解をとるか否かという点である。クリプキは「＋」

という規則、その規則に関する「＋」あるいは「⊕」という解釈、「125」あるいは「5」という「行動（答え）」という枠組みで動いている。クリプキの懐疑論者は「5」と答える理由として「クワス算」つまり「x，y＞57ならばx⊕y＝5」という「解釈」を持ち出す。クリプキによると「125」という答えは規則を「＋」と解釈することから導かれ、「5」という答えは規則を「⊕」と解釈することから導かれる。すなわちここには「＋→125」「⊕→5」という図式が成立するということ、解釈から行動が一義的に決まるという考えが前提されているのである。これはクリプキが「規則の解釈」から「行動」を決定できるという立場に立っていること、すなわち二〇一節の「どんな行動の仕方も規則と一致させることができる」という立場に立っていることを意味する。(7) しかしこの立場はすでに見たようにヴィトゲンシュタインによって批判される一九八節（二〇一節）の「対話者」の見解である。ヴィトゲンシュタインは「規則-規則の解釈」が「行動」を決定できるというこの見解をまさに誤解として批判するのである。しかし、クリプキはヴィトゲンシュタインが二〇一節で主張しているポイントを理解していない。これがクリプキの大きな誤解である。この意味でクリプキの解釈はヴィトゲンシュタイン解釈として受け入れることはできないのである。

結論

本稿は、『探究』二〇一節、とりわけ二〇一節第一パラグラフを解明することを課題とした。これまでの考察から明らかになったように、ヴィトゲンシュタインのネガティブな主張は「どんな行動の仕方も規則と一致させることができる」を否定することであり、ポジティブな主張は「規則は行動の仕方を決定できない」である。「どんな行動の仕方も規則と一致させることができる」というテーゼは、その見解をとることによって「規則に従う」ということが意味を持たなくなる（二）という批判と、「規則の解釈」から「行動の仕方」を決定することはできない（三）という批判の二つの論点から否定される。『探

究』は二〇一節での「規則は行動の仕方を決定できない」というパラドクスとともに「規則に従うこと」に関する議論の頂点に達する。

このような解釈から二〇一節の第一パラグラフ全体を「パラドクス」と理解しそれをヴィトゲンシュタインの「懐疑的パラドクス」と位置づける解釈（クリプキ）も、それ全体がヴィトゲンシュタインによって誤解として批判されているパラドクスであるという一般の解釈も退けられる。二〇一節の「パラドクス」とはまさに「規則が行動のしかたを決定できない」という箇所のみを指しているのであり、また「我々の」という表現はヴィトゲンシュタインが認めるということを意味しているのである。

ここで「我々の」という表現に注目したい。「我々」とはヴィトゲンシュタインとヴィトゲンシュタインの対話者の両者のことを指すのである。このことは一九八節で対話者が「規則は私がこの場所で何をすべきかをどの様にして私に教えることができるのか？」と語っていることから明らかであろう。すなわち「規則は行動の仕方を決定できない」というテーゼはヴィトゲンシュタインと対話者がともに共有している前提なのである。このことは対話者がヴィトゲンシュタインによって完全に否定されるような低い位置に位置付けられていないということを意味する。対話者はヴィトゲンシュタインときわめて近い位置にいるのである。これに対して、一般的な解釈のように二〇一節第一パラグラフ（すなわち一九八節の対話者の見解全体）をヴィトゲンシュタインが完全に否定しているという解釈は、対話者の位置を完全に貶めていることを意味する。しかし対話者はヴィトゲンシュタインと議論を共有できる高度な対話者であり、ヴィトゲンシュタインによって自問されるヴィトゲンシュタインの分身なのである。一九四八年十二月二十六日の「私はほとんど常に私自身のとの対話を書いている。私が私自身に四つの目で語っていることである。」（VB, S147）というテーゼは『探究』における対話という形式にも生きているのである。

ヴィトゲンシュタインの対話者はヴィトゲンシュタインのテキストを解釈するに当たって非常に重要な手掛かりとなる。

本稿も一九八節の対話者の発言が解釈の手掛かりとなった。ヴィトゲンシュタインと対話者という枠組みから我々はヴィトゲンシュタインが何を批判し何を主張しているのかを明らかにした。「規則が行動のしかたを決定できない」というパラドクスはヴィトゲンシュタインも対話者も共有する。これに対して「どんな行動の仕方も規則と一致させることができる」という意見はヴィトゲンシュタインの「対話者」のものでありこれこそヴィトゲンシュタインが否定するものなのである。クリプキが「懐疑的パラドクス」と理解しているのは、まさにヴィトゲンシュタインによって否定される「対話者」の意見である。クリプキは一貫してヴィトゲンシュタインの対話者の立場にいるのである。

凡例

Ludwig Wittegnstein, Philosophische Untersuchungen, 1984, Shurkamp は『哲学探究』あるいは『探究』と略記する。本文の引用の後の（§198）などの表記は同書の節番号である。

Ludwig Wittegnstein, Vermischte Bemerkungen, 1994, Shurkamp は（VB,S～）と略記する。

Saul A. Kripke, *Wittgenstein On Rules and Privete Language*, 1982, Harvard University Press からの引用は（Kripke,p～）（～はページ番号）と略記する。

註

(1) これはベイカーとハッカーの分類(G.P.Baker and P.M.S.Hacker, *Wittgenstein Rules, Grammar and Necessity*, Blackwell Publishres, 1985) に従うものである。

(2) Saul A.Kripke, *Wittgenstein on Rules and Private Language*, Harvard University, 1982

(3) Norman Malcom, *Nothing Is Hidden*, Basil Blackwell, 1986

Colin McGinn, *Wittgenstein On Meaning*, Basil Blackwell, 1984

(4) 「クリプキがヴィトゲンシュタインをこのようなしかたで読むべきだと言っていることは驚くべきことである、なぜならヴィトゲンシュタインは二〇一節の中の直接に続くパラグラフにおいて、この「パラドクス」は誤解であると続けて言うからである。(・・・・)ヴィトゲンシュタインはいかなる行為の仕方も規則と一致する、というパラドクスを支持しなかった。彼はその代わりに、このパラドクスがもし規則を理解する唯一の道はそれについての解釈を与えること—すなわち規則のある定式を他の定式で置き換えること—であったのならば、その結論であろうと言っていたのである。」(Norman Malcom, *Nothing Is Hidden*, Basil Blackwell, 1986, p.155)

「二〇一節においてヴィトゲンシュタインは、理解に関する解釈説を彼自身のとる見解と対照させている。彼はまずはじめに一つのパラドクスを立てている。そのパラドクスとは、規則はいかなる規範的な力も持ち得ない、なぜならどのような事でも規則と矛盾させる事もできるし、又逆に合致させる事もできるからというものである。」(Colin McGinn, *Wittgenstein On Meaning*, Basil Blackwell, 1984, p.42)「この部分には、クリプキの解釈が誤りである事を示す点で注目すべき二つの問題がある。第一に、既述のパラドクスが「誤解」から、すなわち誤った前提から生じた事をヴィトゲンシュタインは直ちに明らかにしている。ということは、彼がパラドクスを実際に支持しているはずがないのであり(・・・)」(ibid, p.68)

「二〇一節第一パラグラフは一九八節第一パラグラフのテーマを繰り返す。「パラドクス」が議論を再開させる、すなわち、規則は行動を正しく決定できない、何をすべきかを私に示せない、何が規則に従っているのかを規定できない。なぜできないのか?なぜならどんな行動の仕方もある解釈を用いることで規則に従っている振りをすることができるからである。」(G.P.Baker and P.M.S.Hacker, *Wittgenstein Rules, Grammar and Necessity*, Blackwell Publishres, 1985, p.144)

「しかし彼は、常に可能な別の解釈が存在するので「どんな行為の仕方も規則によって決定され得ない」という懐疑的「パラドクス」が「誤解」に基づくとも述べた。」(Hans-Johan Glock, *A Wittgenstein Dictionary*, Blackwell Publishres, 1996, p.327)

(5) 「それ故ここには一致も矛盾も存在しないのであろう」の部分は二〇一節の最初の草稿では「それ故、ここでは「矛盾」も「一致」もその意義を完全に失うのである」となっている(G.P.Baker and P.M.S.Hacker, *Wittgenstein Rules, Grammar and Necessity*, Blackwell Publishres, 1985, p.147参照)。

(6) クリプキによると、ヴィトゲンシュタインは、そのような懐疑論を受け入れつつも、それを解決しているという。その意味で「懐疑的解決(sceptical solution)」と言われる。「懐疑的パラドクス」が生じるのは、それが一個人についての正当性を問うからだという。一個人について「+」が何を意味するのかを問う限り、すでに見たように「懐疑的パラドクス」によってその正当性が奪われると言うのである。「懐疑的解決」は、そのような語の意味(例えば「+」の意味)を、共同体の慣行によって正当化しようとするものである。すなわち、共同体の慣行から正当化・そのような言明の可能性が言われ得るというのである。

「懐疑的解決」に関する問題点として、ヴィトゲンシュタインのテキストから「共同体論」が読めるかどうかという指摘がある。これに関しては、マッギンの議論で明確な態度がとられている。それはヴィトゲンシュタインのテキストから「共同体論」が読みとれないというものであり、我々はこの点に関しては彼の立場に同意する(Colin McGinn, *Wittgenstein On Meaning*, Basil Blackwell, 1984, p.77-84を参照)。もう一つの問題点として、ヴィトゲンシュタイン解釈とは独立にクリプキ自身の議論が誤っていることも指摘できる。この点に関しては、エイヤーによって的確な批判がなされている(A.J.Ayer, *Wittgenstein*, The University of Chicago Press, 1985, p.74を参照)。

(7) 「もし私がアディションを意味していたとすれば、私の以前の「プラス」の使用法と一致するために、「68プラス57」の計算結果を与えるよう問われた時私は「125」と答えるべきである。もし私がクワディションを意味していたとすれば、その時私は「5」と答えるべきである。」(Kripke, p.12)

(本学大学院博士課程・倫理学)